



Rotary Opens Opportunities

2020～2021 年度 国際ロータリーのテーマ
ロータリーは機会の扉を開く

ホルガー・クナーケ

篠原 徹

2020～2021 年度
 国際ロータリー会長

2020～2021 年度
 第 2670 地区ガバナー

小松島ロータリークラブ

例会日 毎週金曜日[12:30～13:30]

例会場 菊寿殿 おがわ 小松島市小松島町字外開 7-1

TEL:0885-32-0205

事務局 小松島市金磯町 10-19 TEL:0885-33-1211

2021 年 4 月 16 日
 第 3393 回 例会記録

会員総数	21 名
出席会員	名
本日出席率	%
前回出席率	%

会長報告 ・
 (加藤好包)

幹事報告 ・
 (青木正廣) ・

委員会報告 ・
 ・

卓 話 加藤会長“鴨 長明”について



・日本中期の三大随筆

・枕草子 清少納言 [をかしの肯定文]強気の聡明な、ねーちゃん
 春はあけぼの。やうやう白くなりゆく、山ぎは少しあかりて、むらさきだ
 ちたる雲のほそくたなびきたる。

・徒然草 兼好法師 [謙遜の辞]インテリのいやみちゃん
 つれづれなるままに、日くらし硯に向かひて、心にうつりゆくよしなしご
 とをそこはかとなく書き付くれば、あやしうこそもの物狂ほしけれ。

・方丈記 鴨 長明 [多才だが、弱気の落ちこぼれの、ぼっちゃん]
 ゆく川の流は絶えずして、しかも、もとの水にあらず。

随筆の特徴は所詮、自己顕示欲のためと思われるが、作者個人のそ
 れぞれ性格が理解できることが面白い

■方丈記：ゆく川の流は絶えずして(原文)

ゆく川の流は絶えずして、しかも、もとの水にあらず。淀みに浮ぶうたかたは、かつ消えか
 つ結びて、久しくとどまりたるためしなし。

世の中にある人のすみかと、またかくのごとし。たましき都ののうちに、棟を並べ、壘を争へ
 る、高き、卑しき人のすみひは、世々を経て尽きせぬものなれど、これをまことかと尋ぬれ
 ば、昔ありし家はまれなり。或は、去年焼けて今年作り。或は、大家滅びて小家となる。

住む人も、これに同じ。所もかはらず、人も多かれど、いにしへ見し人は、二三十人が中に、
 わづかに一人二人なり。朝に死し、夕に生まるるならひ、ただ水の泡にぞ似たりける。

知らず、生れ死ぬる人、いつかたより来りて、いつかたへか去る。また知らず、仮の宿り、誰
 がためにか心を悩まし、何によりてか、目を喜ばしむる。その主とすみかと、無常を争ふさま、
 いはば、朝顔の露に異ならず。或は、露落ちて花残れり。残るといへども、朝日に枯れぬ。
 或は、花はしぼみて露なほ消えず。消えずといへども、夕べを待つことなし。



■鴨長明の生誕、死去

1155年(久寿2年)に生まれ 1216年(建保4年)に没す。
当時の平均寿命は29歳と言われている。この時代では長生きと言える。

■鴨 長明 略歴

・平安時代末期から鎌倉時代前期にかけての歌人、随筆家・鴨長継の次男。位階は従五位下。法名は蓮胤。南大夫、菊大夫とも称される。
・賀茂御祖神社(下鴨神社)の神事を統率する禰宜の鴨長継の次男として京都で生まれた。高松院の愛護を受け、応保元年(1161年)従五位下に叙爵されたが、承安2年(1172年)頃に父・長継が没した後は後ろ盾を失った。安元元年(1175年)長継の後を継いだ禰宜・鴨祐季と延暦寺との間で土地争いが発生して祐季が失脚したことから、長明は鴨祐兼とその後任を争うが敗北してしまう。



■下賀茂神社

■恵まれぬ人生を生きる

下鴨神社の正禰宜の次男として生まれ、比較的恵まれた環境で育っていました。しかし、長明が18歳の時に父が急死してしまいます。母も既に亡くなっていた為、長明は”みなしご”として生きていく事になります。

■遁世に至るまで

元久元年(1204年)、かねてより望んでいた河合社(ただすのやしろ)の禰宜の職に欠員が生じたことから長明は就任を望み、後鳥羽院から推挙の内意も得る。しかし、賀茂御祖神社禰宜の鴨祐兼が長男の祐頼を推して強硬に反対したことから、長明の希望は叶わず、神職としての出世の道を閉ざされる。そのため、後鳥羽院のとりなしにも関わらず長明は近江国甲賀郡大岡寺で出家し、東山、次いで大原、後に日野(現・京都市伏見区醍醐)に閑居生活を行った。

■歌人として

出家後は蓮胤(れんいん)を名乗ったが、一般には俗名を音読みした鴨長明(ちょうめい)として知られている。建暦元年(1211年)には飛鳥井雅経の推挙を受けて、将軍・源実朝の和歌の師として鎌倉へ下向したものの、受け入れられず失敗している。建暦2年(1212年)に成立した『方丈記』は和漢混淆文による文芸の祖、日本の三大随筆の一つである。他に同時期に書かれた歌論書の『無名抄』、説話の『発心集』(1216年以前成立)、歌集として『鴨長明集』(養和元年(1181年))といった作品がある。『千載和歌集』(1首)以下の勅撰和歌集に25首が入集している

■不運の人

鴨長明は、とても不運な人生を辿った人でした。父は『下鴨神社』・賀茂御祖神社(かもみおやじんじゃ)の神官を務めていた鴨長継(かものながつぐ)で、恵まれた幼少期を過ごしましたが、有力な後ろ盾となるはずであった父が早くに亡くなり、鴨長明自身は神官の職を得ることができませんでした。和歌の名人としても名高かった鴨長明は、その後、歌人として何とか生計を立てていきますが、生活は決して楽なものではなかったようです。

■方丈庵

1204年、鴨長明が50歳頃の年に、『下鴨神社』の摂社(本社に付属する神社)である『河合社』の禰宜(ねぎ・神職の位。神主のひとつ下の役)に欠員が生じます。『下鴨神社』の神職に就くためにはまず『河合社』の禰宜を務めるのが通例であったため、かねてよりの念願を叶えようと、鴨長明は朝廷に働きかけます。しかし、後鳥羽院(ごとばいん)の推挙があつたにもかかわらず、当時『下鴨神社』の禰宜であった鴨祐兼(かものゆうけん)から妨害を受け、結局長年の夢が叶うことはなかったのです。大変な衝撃を受けた鴨長明は、これをきっかけに出家し、各地を転々とした後、京都の日野という場所に小さな庵を建てます。随筆はここで書き上げ、庵の広さが方丈(1丈・約3m)四方であったことから、鴨長明自ら、『方丈記』と名付けました。



■下賀茂神社にある長明の庵を再建したもの

■琵琶、和歌の才人

・資料長明は相続争いに敗れるなど、不遇が続き、父方の祖母の家を継ぐ立場で妻子が居た事もあったようですが、30歳頃に離別。それからはずっと一人で暮らしていました。そんな長明が生きがいとしていたのは、音楽と和歌でした。若い頃より中原有安に琵琶を学び、和歌は俊恵に師事して才能を磨きます。歌合への参加、千載和歌集への採用など、徐々に長明の和歌は評価されていきました。
・47歳の時には後鳥羽院に才能を認められ、和歌所の寄人にも抜擢されます。しかし、後鳥羽院が厚意で長明

の父の跡を継がせようと図ったところ、親族に邪魔され、長明は出家します。

・その後質素な方丈庵での暮らしをはじめ、方丈記の執筆に繋がります。

■歌人、楽師として

俊恵の門下として、琵琶を楽所預の中原有安に学ぶ。歌人として活躍し、歌林苑の会衆として賀茂重保撰の『月詣和歌集』に入撰し、『千載和歌集』にもよみ人しらずとして入集している。以降、石清水宮若宮社歌合、正治後度百首、新宮撰歌合、和歌所撰歌合、三体和歌、俊成卿九十賀宴、元久詩歌合などに出詠し、建仁元年(1201年)8月和歌所寄人に任命された

■方丈記の天災、飢饉に関する記述

- | | |
|-------------------------------|--------------------|
| ・安元の大火 安元 3年 4月 28日 1177年 | ・治承の竜巻 4年 4月 1180年 |
| ・福原遷都池沼 4年 1180年 | ・養和の飢饉 1181年 |
| ・元暦の地震現歴 2年 7月 9日 1185年 8月 6日 | |

■元暦の地震

- ・元暦 2年 7月 9日(1185年 8月 6日)、大きな地震が都を襲った(文治京都地震)。山は崩れ海は傾き、土は裂けて岩は谷底に転げ落ちた。余震は 3 か月にもわたって続いたという。
- ・また、同じころかとよ、おびたしく大地震ふること侍りき。そのさまよのつねならず。山はくづれて河を埋み、海は傾きて陸をひたせり。土裂けて水湧き出で、巖割れて谷にまるび入る。なぎさ漕ぐ船は波にたゞよひ、道行く馬はあしの立ちどをまどはす。

■無常観

仏教の根本思想である無常観とは、「変わらないように見えても変化しないものなどなく、すべては常に変化していて、やがて滅んでいく」という思想です。『方丈記』には、この無常観が徹底して貫かれています。鴨長明の無常観がよく表れている。

■遁世といえども

方丈記からは、鴨長明の「心の揺れ」を読み取ることもできます。鴨長明は、自分の心を苦しめている無常からの解放を願って、隠居する道を選びました。方丈の小さな庵での生活の中で、一旦は安らぎを得られたものの、俗世間と離れた現在の生活をしたいに楽しく感じている自分がある、と『方丈記』の中で鴨長明は語っています。そして、末尾は、草庵での暮らしに執着に近い愛着を抱いている今の自分は、仏教的な往生からは程遠いものではないだろうかと、自身のあり方を問うかたちで結んでいます。

■時代に伴う価値観

- ・平安末期から、鎌倉時代の動乱時に、藤原、平氏、源氏の隆盛の移り変わりを体験するなか、末法思想に伴う、無常の意識を持つこととなる。
- ・完璧な価値観より、不完全、未完成、粗末なものの中より見出された価値観、素のもの、侘びさびの日本特有の価値観が生まれたのも、日本の歴史・天災を繰り返す方丈記の内容からも予測される。
- ・平家物語と同様に無常、栄枯盛衰の世の中を表している。

■遁世と出家

- ・世俗の生活を捨て、仏教の修業ををする。
- ・隠棲して世間の煩わしさから、離れる。
- ・鎌倉仏教では官僧の特権、制約から解放された再出家者、遁世僧の存在が特徴的。

■辞世の句

- ・新古今和歌集より

石川や 瀬見の小川の清ければ 月も流れを尋ねてぞ澄む
草も木も なびきし秋の霜消えて 空しき苔を 払う山風



ニコニコ箱

理事会報告

会員掲示板

その他